



メロス通信 不定期便

山陽小野田市食料支援アンケート調査から見た地域の貧困

6月14日に行われた山陽小野田市の食料支援で職員によるアンケート調査を実施しました。食料支援を求める方々の暮らしぶりを調査し今後の食料支援の活動に活かしていくためです。

以下、一部を抜粋し簡潔にお伝えします。

<対象>

参加者50名のうち60歳以上が全体の8割、20代、10代は3名だった。6割が単身世帯。参加のきっかけは8割が知人や組合員とのつながりからだった。そのうち1名を除くすべての参加者が医療生協の活動に好意的であることが分かった。

<生活状況>

「苦しさを感じない」と答えたのは2名のみで大半が苦しさを感じている。「多少苦しい」としか答えない方のなかには「多少」とは思えない過度な食事や入浴の節約をしており、苦しさの常態化、スティグマ、自己責任論等から「非常に苦しい」と言えない状態にあると思えた。また、米を買うのをやめたもの、米は1日1食だけにするもの、食事の回数や量を減らすもの、生活保護利用者のなかには食事を1日1食まで節約しても何も食べられない日もあると訴えた。週2、3回しか入浴しない人が3割、週1回という人もいた。病院受診を控えるは6名もあったのに対し、介護保険を利用するものは2名しかいなかったうえに2名ともが節約のため利用制限していた。

8割がエアコンを保有しているが、エアコンの購入を控えたり、節約のため利用を制限する人は半数を超えた。そのうちエアコンをまったく利用しない人は2割の11名だった。8割が60歳以上を占めるのに半数が十分にエアコンを利用しておらず熱中症になるリスクが非常に高いことが分かった。

「医療費の支払い困っている」のは3割の16名。うち8世帯が無低診適応かと思われたが、今通院しているところから転院できないために、実際に無低診につながったのは4名。この適応率は非常に高く地域の貧困を背景に不健康が拡大していることが分かった。

<まとめ>

以上、食料支援を求める人々の深刻な実態が明らかになった。このなかで組合員は食料支援を通じて人々のつながりを創出し、支えあいの精神のもと助け合いが行われていることが分かった。さらに民医連においては食料支援が“お金がなくて医療や介護が受けられない方を擁護する貴重なフィールド”であることが分かった。

山陽小野田市の調査ですが宇部市でも変わらない状況が推測されます。医療・介護・まちづくりの視点をもつ私たちの食料支援が命と人権を守る貴重な取り組みになるよう、さらなる組合員さんとの連帯が求められています。

こども明日花プロジェクトをご存じですか？



「どんな環境に生まれ育ってもこどもが明日に希望を持てる社会」の実現のため「子どもの貧困」問題の解決を目指し、地域の一人ひとりの支援をつなぎ、子どもたちを支える、山口市で活躍するNPO団体です。寄付やボランティアの協力を得て手広く無料塾・子ども食堂・居場所づくり・食糧支援など包括的な取り組みが行われています。こうした様々な組織と手を携え社会を変革していくことも私たちの重要な課題です。

今年は健文会でも2回だけでしたが医学生を講師に無料塾を開催しました。この開催にあたりこども明日花プロジェクトを見学し、そこ掲げてあった行動指針が素晴らしく皆様にご紹介させていただきます。医療・介護に携わる私たちにも忘れてはならない初心です。

<こども明日花プロジェクト行動指針>

- ① **まずやってみる**
(動きながら考えるtry&error)
- ② **「共に勝つ」道を探す**
(連携のための戦略を練る)
- ③ **ストレングスに注目する**
(互いの得意を活かす)
- ④ **ひとりでやらないコミュニケーションの手間を惜しむな**
(巻き込み事故上等)
- ⑤ **当事者へのリスペクト**
(主役はあくまで子どもや食堂運営者)



『支え愛ボックス』へのご協力 ありがとうございます

支え愛ボックスを設置して2カ月が経過しました。ご自宅にある様々な遊休品が毎日のように届いております。一部は直接当事者の方へ、一部は無償で食料支援会場で譲渡され、一部は組合員さんが換金して食料支援のカンパに利用され、すべてを有効活用させていただいております。食料支援のアンケート調査結果もお伝えしましたが皆さまの善意を必要とする活動はたくさんあります。

今後も引き続きご支援していただきますようお願い申し上げます。

